Nara Women's University

『なよ竹物語』絵巻の諸本について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学大学院人間文化研究科 公開日: 2012-05-09 キーワード (Ja): 『なよ竹物語』, 絵巻, 諸本, 曇華院 キーワード (En): 作成者: 横山,恵理 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2959

『なよ竹物語』絵巻の諸本について

横山恵理
（比較文化学専攻）

はじめに

『なよ竹物語』は十三世紀末以降に成立したと考えられる物語で、別名『鳴門中将物語』とも言われる。本稿は、絵巻物の形態を持つ『なよ竹物語』諸本の書誌情報を整理することを目的とする。（注1）

一、『なよ竹物語』諸本一覧

絵巻物形態の『なよ竹物語』は二系統に分けられる。すなわち、「いづれのとしの春とかや、やよひの花ざかり」という詞書で始まる金刀比羅宮蔵本系統と、冒頭部分に後嵯峨天皇略伝及び即位時の政治的確執を記した絵と詞書を持つ曇華院蔵本系統である。

諸本十本を二系統に分け、以下に記す。

・金刀比羅宮蔵本系統

①金刀比羅宮蔵『なよ竹物語』（『絵草紙　なよ竹くれ竹』）

②東京国立博物館蔵『奈与竹物語』

③国立国会図書館蔵『弱竹物語』

④東海大学附属図書館桃園文庫蔵〔なよ竹物語絵巻〕

⑤東京大学史料編纂所蔵『絵草紙　或なよ竹又くれ竹』

・曇華院蔵本系統

⑥曇華院蔵（京都国立博物館寄託）『なよ竹物語』

⑦宮内庁書陵部蔵『鳴門少将物語』

⑧東海大学附属図書館桃園文庫蔵〔なよ竹物語絵巻〕

⑨個人蔵『なよ竹物語』

⑩東北大学附属図書館蔵『那與竹物語』

二、諸本の書誌情報

はじめに、諸本の書誌情報について整理する。

①金刀比羅宮蔵『なよ竹物語』（『絵草紙　なよ竹くれ竹』）（注2）

［形態］絵巻、一軸

［寸法］縦三一・四糎、横一三一七・四糎

［紙数］四十二紙　［挿絵］九図

［奥書］なし

［書写年代］十四世紀半頃の写か。

②東京国立博物館蔵『奈与竹物語』（注3）

［形態］絵巻、一軸

［奥書］

弱竹物語一弓者正二位大納言為家卿所併書、而蔵人画所預正五位上行主殿頭藤原隆能之画也。後深草天皇所寄附讃州綾（ママ・筆者注）松山白峯寺、崇徳天皇陵廟中而為廟中上第之奇宝也。隆能、乃土佐氏之祖、而正二位中納言清隆之仲子以春日為家称、而妙画通霊矣。余與白峯寺主有知己之遇。竊乞借摹写之。蔵中衍中、以比禁方、資宮殿服色之制、以為他日後素之具也。為余之後者、莫出梱外矣。莫写以示人矣。

寛政十有二年庚申三月　法橋豊泉源孝之

古土佐筆

此本写松平越中守殿より来ル

文化九壬申年正月廿二日写養信

［書写年代］文化九（一八一二）年

［備考］狩野養信摸写。

③国立国会図書館蔵『弱竹物語』（注4）

［形態］絵巻、一軸

［寸法］縦三一・〇糎

［外題］弱竹物語

［内題］弱竹物語　ク四ノ十一

［奥書］書　写　正恭　　画　摹　文膺

［書写年代］江戸時代後期の写か。

④東海大学附属図書館桃園文庫蔵〔なよ竹物語絵巻〕

［形態］絵巻、一軸

［寸法］縦二八・〇糎、横五七八・五糎

［表紙］本文共紙

［外題］なし

［内題］なし

［紙数］八紙　　［料紙］斐紙

［字高］約二〇糎

［奥書］識語「以上本人の終りに約一尺二三寸余白ありて軸を附す軸ハ直径約六分五六厘とおほしく八角形の黒色のものなりその質ハ不明　巻物堅幅ハ約一尺三寸位と覚ゆ」（第七紙）・「右ハ讃州金刀比羅宮秘蔵（国宝）なよ竹物語絵巻物の詞書なり東京美術館名宝展覧会に出品の節その絵詞のみを写したるもの也」（第八紙）

［書写年代］近代

［備考］①金刀比羅宮蔵本の詞書のみの書写。絵は存在せず。ただし、絵が描かれていた八箇所に、それぞれの絵の内容を簡潔に説明した文章を朱筆で加える。

⑤東京大学史料編纂所蔵『絵草紙』

［形態］袋綴、一冊

［寸法］縦三四・五糎、横二六・三糎

［表紙］厚紙（改装後）

［外題］『絵草紙　或なよ竹又くれ竹』（改装前の部分）

［内題］なし
［料紙］斐紙
［奥書］右絵草紙或なよ竹又くれ竹　讃岐国那珂郡金比羅宮境外摂社白峰神社蔵本明治廿一年五月修史局編修長重野安繹採訪明季一月影写了
［書写年代］明治二二（一八八九）年
［備考］①金刀比羅宮蔵本の詞書のみを忠実に摸写。絵は存在せず。ただし、絵が描かれていた箇所には「此ニ画アリ」と記す。また、本文中の平仮名を漢字に直す等の書入が僅かに見られる。
本文冒頭部分の前に「函ノ裏書ニ　絵草紙なよ竹くれ竹とも云　後深草院御奉納　右筆ハ為家卿画工ハ藤原隆能□（絵か。筆者注。）所預春日隆能土佐二代目此時代者春日云也後ニ土佐ト云」という書入がある。

⑥曇華院蔵（京都国立博物館寄託）『なよ竹物語』
［形態］絵巻、一軸
［寸法］縦三七・二糎、横一九五四・八糎
［表紙］布表紙
［外題］なし
［内題］なし
［紙数］三十四紙　［挿絵］十二図　［料紙］鳥の子紙
［奥書］なし
［書写年代］江戸前期の写か。（注5）
［法量表］（内容は参考までに掲載するが、その詳細な検討は別項に譲る。）

単位：cm

紙	法量	内容	十七	60・5	絵三
表紙縦	37・2		十八	58・5	詞三
表紙横			十九	95・5	絵四
第一紙目縦	37・2		二十	74・0	詞四
一	60・5	詞a	二十一	45・2	絵五
二	30・0	絵A	二十二	50・0	絵五
三	16・0	絵A	二十三	16・0	絵五
四	79・5	絵A	二十四	92・5	詞五
五	90・5	詞b	二十五	68・0	絵六
六	41・5	絵B	二十六	27・0	絵六
七	51・5	絵B	二十七	14・5	絵六
八	17・0	絵B	二十八	90・5	詞六
九	88・0	詞c・一	二十九	58・0	絵七
十	13・8	絵一	三十	75・8	詞七
十一	79・5	絵一	三十一	95・5	絵八
十二	16・0	絵一	三十二	81・5	詞八
十三	62・0	絵二	三十三	94・5	絵九
十四	60・5	詞一	三十四	16・5	絵九
十五	62・5	絵C	三十五	16・0	軸付
十六	56・0	詞二	計	1954・8	

⑦宮内庁書陵部蔵『鳴門少将物語』
［形態］絵巻、一軸
［寸法］縦三九・九糎、横一七九九・〇糎

五九

［表紙］布表紙
［外題］鳴門少将物語
［内題］なし
［紙数］一一二紙（注6）　［挿絵］十二図
［料紙］斐紙を鳥の子紙に貼る。
［奥書］なし
［書写年代］江戸期の写か。
［備考］詞書を記した料紙の裏に数字を付した箇所が二箇所ある。数字と詞書の段数が一致することから、詞書の順番を示すものと思われる。

⑧東海大学附属図書館桃園文庫蔵〔なよ竹物語絵巻〕
［形態］絵巻、一軸
［寸法］縦三五・〇糎、横一〇一三・三糎
［表紙］布表紙
［外題］なし
［内題］なし
［紙数］三十九紙　［挿絵］十二図　［料紙］楮紙
［奥書］住吉内記廣行写之
［書写年代］住吉廣行の生没年より、宝暦五（一七五五）から文化八（一八一一）年の間の写か。
［備考］絵のみの摸写。詞書存在せず。

⑨個人蔵『なよ竹物語』
［形態］絵巻、一軸
［寸法］縦三九・三糎、横一一五二・二糎
［表紙］本文共紙
［外題］なよ竹物語
［内題］なし
［紙数］四十八紙　［挿絵］十二図　［料紙］斐紙
［奥書］文政十二己丑歳仲春写之　従五位下右衛門権大尉兼出雲守藤原寿永（「寿永出雲」の印あり。）
［書写年代］文政十二（一八二九）年の写。
［備考］絵のみの摸写。詞書存在せず。ただし、詞書が存在した箇所には「詞」と記す。また、料紙の裏に絵の順番を示す数字を付した箇所が七箇所ある。

⑩東北大学附属図書館蔵『那與竹物語』
［形態］絵巻、一軸
［寸法］縦三九・〇糎、横九九六・二糎
［表紙］本文共紙
［外題］那與竹物語　単
［内題］なし
［紙数］三十七紙　［挿絵］十二図　［料紙］斐紙
［奥書］なし
［書写年代］江戸後期の写か。
［備考］絵のみの摸写。詞書存在せず。

三、考察

次に、調査を通じて気付いた点を項目別に考察する。

（一）⑥曇華院蔵本の料紙について

まず、⑥曇華院蔵本を料紙の観点から考察したい。

⑥曇華院蔵本は詞書十一紙、絵二十三紙の全三十四紙から成る。詞書は一段毎にそれぞれ一枚の料紙に書かれる。①金刀比羅宮蔵本の詞書が複数の料紙を継いで書かれていることを考えると、⑥曇華院蔵本はそれ以前に成立した詞書に基づいて、詞書を書写したことが推測できる。

絵の段においても、①金刀比羅宮蔵本と構図が共通する段はそれぞれ一枚の料紙に描かれる（注7）。しかし、①金刀比羅宮蔵本と図様が大きく異なる箇所では料紙の継ぎ目が増えるのである。①金刀比羅宮蔵本には存在せず、⑥曇華院蔵本のみが有するような冒頭の絵二段も一枚の料紙に描かれることはない（注8）。

この問題について加須屋誠氏は、⑥曇華院蔵本が基とした絵巻が存在していた可能性を指摘されている。氏は、⑥曇華院蔵本制作者が、基とした絵巻の料紙寸法に合わせて料紙を用意したものの、事情があって変更を余儀なくされたため、変更箇所のみ料紙を増補することで対応した。そのため、①金刀比羅宮蔵本と異なる構図を描いた料紙で継ぎ目が増えたのであろうと分析しておられる。

加須屋氏の御論と同様のことは冒頭部分詞書の比較からも述べることができるが、別稿に譲ることとする。

（二）錯簡の問題

次に、絵の錯簡の問題について検討する。

錯簡が顕著に見られる段は、①金刀比羅宮蔵本では最後に付された「妻の参内により夫の少将が中将に昇進、随身と参内する様子」の段である。この段は後嵯峨天皇の参賀と捉えられ、⑦宮内庁書陵部蔵本・⑨個人蔵本で、冒頭部分の後嵯峨天皇即位の故事に続く絵として挿入されている。⑩東北大学附属図書館蔵本も、現在は①金刀比羅宮蔵本同様最後に付すが、料紙を調査した結果、錯簡が生じていた時期があったことが推測できる（注9）。なお、③国立国会図書館蔵本では「最勝講開白の日」の段の直後に挿入されているが、やはり、少将を別の人物と解釈したためであろう。

特筆すべきは、⑦宮内庁書陵部蔵本の錯簡である。⑦宮内庁書陵部蔵本は曇華院蔵本系統に属するため、冒頭部分に後嵯峨天皇即位時の故事を有するが、詞書本文を⑥曇華院蔵本とは異なる箇所で分けている。すなわち、冒頭部分詞書の内容を、⑥曇華院蔵本が後嵯峨天皇即位前と即位後の記事を明確に分けず一枚の料紙に続けるのに対し、⑦宮内庁書陵部本は即位前と即位後を厳密に区別し⑥曇華院蔵本とは異なる詞書本文で区切り、さらに即位前と即位後の本文の間に絵を挿入するのである。その上、「少将参内の図」が後嵯峨天皇即位後の詞書の直後に配されていることから、⑦宮内庁書陵部本が「少将参内の図」を「後嵯峨天皇参内の図」と解釈していることは明らかで、後嵯峨天皇の即位に対し、並々ならぬ関心を寄せている様相が窺える。そもそも、曇華院蔵本系統は後嵯峨天皇即位の経緯を重要視する傾向にあると考えられる（注10）が、⑦宮内庁書陵部本は特にその傾向が顕著であると言うことができよう。

他の錯簡の問題に関しては、⑧桃園文庫蔵本や⑩東北大学附属図書館蔵本で他本とは異なる絵の配列となっている箇所があるが、どちらも詞書が存在せず、絵のみの摸写のため、作品内容とあわせて享受できる環境になかったためであると推測される。また、料紙が剥がれて錯簡が起こりやすい状態にあったことが、⑦宮内庁書陵部蔵本や⑨個人蔵本が、料紙の裏に数字を付すことで錯簡を防ごうとしていたとこ

ろから窺える。

（三）散逸諸本について

最後に、現在は所在が確認できないが、かつて存在していた可能性がある諸本について考えたい。

まず、金刀比羅蔵本系統から考察する。前掲の②東京国立博物館蔵本奥書から、次のような経緯を知ることができる。寛政十二（一八〇〇）年三月に法橋豊泉源孝之が白峯寺蔵本（現①金刀比羅宮蔵本）を摸写。この源孝之摸写本を写した本（「古土佐筆」）が松平越中守の所持本となる。さらに、松平越中守所持摸本を狩野養信が摸写。現在、②東京国立博物館蔵本として所蔵されている。このことから、金刀比羅蔵本系統の諸本は②東京国立博物館蔵本以外に、源孝之摸写本と松平越中守所持摸本の二本が存在していたことが分かる。

続いて、曇華院蔵本系統について考察する。『訂正増補考古画譜』（注11）には浮田一蕙摸写本の存在が記されている。浮田一蕙摸写本奥書から、浮田一蕙摸写本は土佐光起摸写本の写しであること、土佐光起摸写本は粟田口法眼隆光筆を摸したものであることが分かる（注12）。また、黒川春村は「一本絵巻物発端」（注13）として曇華院蔵本系統の本を紹介しているが、その奥書には、詞書は飛鳥井雅章の筆、絵は住吉如慶の筆による本を、享和元（一八〇一）年に源恒之が写したという記事があるという（注14）。以上より、曇華院蔵本系統には、粟田口法眼隆光摸本、土佐光起摸写本、浮田一蕙摸写本、飛鳥井雅章と住吉如慶による本、源恒之摸写本の五本が存在していたことが推測される。

おわりに

以上、『なよ竹物語』絵巻の諸本を確認した。特に近世において、積極的に摸写されていく様相を窺うことができた。本作品の享受史を改めて問い直し、今後、⑥曇華院蔵本の成立を明らかにする際の一助としたい。

本稿を成すにあたり、調査をお許し下さいました各所蔵機関、並びに御教示・御助言を賜りました石川透氏・加須屋誠氏に厚く御礼申し上げます。

（注）

（1）『なよ竹物語』の諸本に関しては、平林文雄氏の先行の御研究（平林文雄『なよ竹物語研究並に総索引』白帝社、昭和四九年）がある。

（2）①金刀比羅宮蔵本は未見。小松茂美編『日本の絵巻17　奈与竹物語絵巻・直幹申文絵詞』（中央公論社、昭和六三年）を参照した。

（3）②東京国立博物館蔵本は未見。小松茂美編『日本絵巻大成20　なよ竹物語絵巻・直幹申文絵詞』（中央公論社、昭和五三年）の図版解説に掲載されている巻末奥書の写真を参照した。翻刻にあたり、私に句読点を付した。

（4）③国立国会図書館蔵本はマイクロフィルムによる調査にとどまり、原本を実見してはいない。［寸法］は『安倍晴明と陰陽道展』図録（平成十五年七月、於京都文化博物館）所収の出品リストに拠る。また、その解説（大塚浩美氏担当）では、文字は版本により、絵は谷文晁に学んだ江戸の画家、遠阪文膺（一七八三～一八五三）によるものとされる。

（5）石川透氏にモノクロ写真を見ていただき、寛永（一六二四～一六四三）より少し後で、元禄（一六八八～一七〇三）以前の成立であろうとの御教示を賜った。曇華院蔵本の成立時期および伝来事由についての詳細な検討は別稿を用意することとしたい。

（6）⑦宮内庁書陵部本の料紙法量は、最長が二七・〇糎、最短が一・〇糎であり、長短様々な料紙が混在している。

（7）①金刀比羅宮蔵本と⑥曇華院蔵本との図様が共通する段で継ぎ目が多いのは、①金刀比羅宮蔵本第一段に該当する蹴鞠の場面のみである。⑥曇華院蔵本ではこの段を三紙に分けて描くが、中心場面に継ぎ目はない。今は⑥曇華院蔵本成立問題に大きく関係するものではないと考えている。

（8）⑥曇華院蔵本には幅九五・五糎の料紙を用いた場面が三段あるため、長い料紙を用意できなかったという可能性は否定できる。なお、①金刀比羅宮蔵本が有しない「蔵人が仰せを賜る図」は一枚の料紙に描かれるが、この図に類似する構図は多くの絵巻物にあり、絵師が容易に描くことができたためと考えられる。

（9）⑩東北大学附属図書館蔵本は、一枚の料紙に二つの場面を連続して描くことがないという手法を用いるのに反して、本図のみは一枚の料紙に傍線を付す形で前の段の絵に続けている。⑩東北大学附属図書館蔵本も⑦宮内庁書陵部蔵本・⑨個人蔵本と同様に錯簡が生じていたが、訂正したものと思われる。

（10）曇華院蔵本系統の冒頭部分に関する分析は、成立問題と合わせ、別稿を用意することとしたい。

（11）『訂正増補考古画譜』は黒川眞道編集『黒川眞頼全集』（国書刊行会、明治四三年）に拠る。『訂正増補考古画譜』は黒川春村原稿、古川躬行纂輯、黒川眞頼増補。

（12）前掲注（11）本文に「四郎（片野四郎。筆者注。）曰、浮田一蕙の摸写にして、其の奥書左のごとし、（略）余土佐光起朝臣のうつしたりける絵本を見侍るに（略）光起朝臣のうつしは、粟田口法眼隆光の筆なるべし」とある。

（13）室松岩雄編集『国文註釈全書　物語註釈十二種附神楽歌催馬楽註釈二種』（國學院大学出版部、明治四三年）所収本文に拠る。

（14）奥書には次のように記されているという。「奥書云、本云、なると中将一巻、詞書飛鳥井故一位雅章真筆、絵住吉如慶筆、享保十六（一七三一）年亥霜月二日写之、右一巻享和元（一八〇一）年辛酉秋七月四日書写了、源朝臣安寛、右画令源朝臣恒之摸写畢」（西暦は私に付す。）